式辞

雪深い今年の冬も、甲田の峰々に早春の気配満ち、この舘野ケ原のその雪の下からも、春の訪れを力強く感じる今日の佳き日。

七戸町長、小又 勉 様をはじめ、多数の来賓の皆様のご臨席を賜り、第七十二回卒業証書授与式を挙行できますこと、厚く御礼申し上げます。

保護者の皆様におかれては、卒業証書を手にしたお子様の姿に、感慨も一入のことと存じます。お祝い申し上げますとともに、本校の教育活動に対してご協力を頂いてこられましたことに深く感謝申し上げます。

九十四名の生徒の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様の名前は、今、九十六年の歴史をもつ本校の卒業証書台帳に確かに刻まれました。これまでの努力と研鑽を心から讃えます。

皆様が入学された令和元年は、翌年に五十六年ぶりとなる東京オリンピックを控え、希望あふれる年でした。しかし、年が明けると早々に新型コロナウイルス感染症が全世界に拡大、困難な時を迎えることとなります。

見えない恐怖からの誹謗中傷や偏った情報に狼狽する人々。科学や理性、合理的精神に基づかない人間の醜さ、愚かさが浮き彫りにされました。

学校も試練の時を迎えました。

来年度から始まる新指導要領は、明治維新以来の大改革です。しかし、その前に授業や行事が通常通りにできない事態となりました。高校生活最大の思い出となる修学旅行。秋祭りでのトラジョサンバ。体育祭、学校祭など多くの学校行事が中止や変更に追い込まれました。通常の状態を未だに取り戻すことができず、以前の状態が忘れられるのではないかとの懸念すらあります。

そして、今また、人類は危機に瀕しています。

戦後、グローバリズムの進展で葬り去られたと思われていた、自国第一主義や帝国主義の思想が恐怖と力で人権を無視し社会を支配しようとしています。

だからこそ、この学び舎を去る皆さんに学ぶことの意味について、今一度考えてもらいたいと思います。

想像しましょう。人の命を守るため、今この瞬間にも懸命に行動する人々のことを。

想像しましょう。ミサイルが飛び交う中で平和を祈る人々のことを。

人は、人を傷つける一方で、命がけで人を助けることもできるのです。その違いはどこから生まれてくるのでしょうか。それは、真理を求め、正しく学ぶ努力をしているのか？否か？に他なりません。

人間は、未完成で弱い動物です。正しく認識することを妨げる先入観を

もって生まれてきます。自分と異なるものを排除・差別したり、羨んだり憎んだり、限りない欲望で、人の心までも自分のものにしようとしたり。うまくいかないと、社会や他人のせいにする。そんな性質は、誰もが生来もっているのです。

だから、正しく学ぶのです。「真理の光求めなん。重き使命を果たしなん。正しき道を歩みなん」と校歌に謳われるように。

この社会はみな人間が作り出したものです。法律も制度も武器もみな人間が作り出したものです。ですから、皆が幸せに暮らす社会をつくるため、人間の本質を知り、正しく行動することを一生学びつづけるのです。

私は、未来を信じています。

皆さんは、学校祭も体育祭も進路活動も、自分たちの力で成し遂げてきました。この三年間、自らの困難に打ち勝ち、友を愛し（敬愛）、正しく努力し（勤勉）、自らの未来を切り拓いて（創造）きました。皆さんは、七戸高校の歴史に確かな足跡を残したのです。そんな君たちですから、できなかったことではなく、できたことに自信を持ち、正しく学び続けてくれるものと信じています。

地域の皆様。

私たちの生徒は、これから実社会に飛び込んでいきます。成年年齢とはいえ未熟です。彼らがこの地で世代交代できるようになるまで、枯れてもなお落ちることのない柏葉に込めた校章の願いのごとく、どうか、いましばらくの間、見守っていただきたいと存じます。

保護者の皆様。

子育て四訓はこう語ります。「乳児はしっかり肌を離すな。幼児は肌を離せ、手を離すな。少年は手を離せ、目を離すな。青年は目を離せ、心を離すな」と。高校の卒業は、物理的にも精神的にも親元を離れることの始まりでもあります。本日のお子様の卒業は、保護者の皆様の人生においても大きな節目の日であろうかと拝察いたします。改めて心からお祝いを申し上げます。

さあ、いよいよお別れです。本日をもって本校を去る皆さんを前に、大きな寂しさを禁じ得ません。しかし、別れは新たな出会いを生みます。皆さんには、きっと、たくさんの素晴らしい出会いが待っていることでしょう。皆さんの前途に幸多からんことを願い、そして、皆さんとのこの素晴らしい一期一会に全ての教職員を代表して感謝します。

この三年間、私たちの生徒でいてくれて本当にありがとうございました。

令和四年三月一日

青森県立七戸高等学校

校長　森田　勝博